

平成18年10月1日
(2006)
第65号
毎月発行
編集
公民館だより編集室
発行
西東京市保谷公民館

西東京市 公民館だより

田無公民館
南町5-6-11
TEL 461-1170
芝久保公民館
芝久保町5-4-48
TEL 461-9825
谷戸公民館
谷戸町1-17-2
TEL 421-3855

保谷公民館
柳沢1-15-1
TEL 464-8211
住吉公民館
住吉町6-1-25
TEL 421-1125
ひばりが丘公民館
ひばりが丘2-3-4
TEL 424-3011

エフエム西東京で活躍 市民スタッフを訪ねて



今回は、地元とのコミュニケーションを大事にしているというエフエム西東京を取材しました。そこでは、約100人もの市民スタッフが番組を支えています。

地域密着型のコミュニケーションFM局は、全国に190ほどありますが、西東京市の「エフエム西東京」の開局は全国で86番目に当たります。このようなローカルな放送局は、阪神・淡路大震災をはじめとして、中越地震や北陸水害でも地元の情報を伝えて、被災者の支えにもなっており注目されました。

さて取材した土曜の午後、エフエム西東京のスタジオ、WE E K L Y M U S I C T O P 20の生放送中です。2人のパーソナリティーとミキシングスタッフが番組の進行をすすめています。市内のCDショップの売り上げを基に、独自のチャートを作成し、テンポのよいトークで曲をつないでいきます。パーソナリティーもミキサーも、ボランティアの市民スタッフです。

「地元とのコミュニケーションを大切に、この街がより良くなっていくキッカケを作れてこそ、存在価値がある」とプロデューサーの有賀さんは語ります。市民の力を活用しようと、開局当初からスタッフを募集、30数人からスタートし、現在では主婦、学生、会社員、定年退職者、自営業などさまざまな人が関わっています。



「地元には何か貢献したい」と

ナリティーとして、月曜日午前の「ふれあいの扉」を担当しています。武蔵野大学の学生でインターンシップ制度の職場体験を通して市民スタッフとなった柏倉さん。「この仕事をしたいと西東京市が第二のふるさとに感じているくらい愛着が湧いてきました」と語ります。

「速報性よりも、他のメディアが伝えられない地域の情報を提供していきたい」と有賀さん。「今後はホームページとの連動、ポッドキャストイング（音声版ブログ）の活用により、市民からの投稿、提言をさらに活かした番組作りを目指して行きたいと考えています」とのことです。

エフエム西東京
84・2MHz
042・451・2630
ホームページ
<http://842fm.west-tokyo.co.jp>

サークル訪問 ～めだがクラブ～

めだがクラブは、田無公民館で「障がいがある人もない人も共に生きる町づくり」をモットーに第2・第5日曜日に活動しているグループです。27年の歴史があり、現在のメンバーは子どもから大人まで総勢80名。常時40人ほどが集まっています。

この日の活動は「ダンボール遊び」。無邪気に遊ぶ子ども達に負けじと、本気で遊ぶ中高生、大学生、社会人のメンバー達。「ここは大人も童心に返って遊べる空間。みんな一人一人がガキ大将なんです」と、発足時からのメンバーの宮崎さん。会の中には幼い子や障がいがある人もいますが、メンバーは彼らを援助するボランティアとして参加しているのはありません。子どもや障がい者は特別な存在ではなく、楽しい空間を共有する仲間なのです。

「みんなが好きだから来ちゃう。話しても遊んでも家族のようですよ」と大学生の根岸さん。参加したきっかけは様々。夏の体験ボランティアが縁で参加した人もいれば、祇園祭に行く催しがきっかけで楽しさを知り参加した40代の男性もいます。中でもすごいのは、物心付く前からここにいたという20歳のあ



ピクニック



クリスマス会

ゆみさんをはじめ、小学生の頃から参加しているメンバーが何人もいること。6歳から27年間参加している久保さんは、レクリエーション担当の要です。「受験等でここを離れたメンバーが、大学生や社会人になって戻って来ます。ここに来れば誰かいる、と思ってくれているのかな」と事務局の田中さん。青少年の居場所がなかなかないといわれていますが、めだがクラブにはそれがありません。小さな時から、親以外の大人と触れ合う機会を持てるのは幸せなこと。地域に自分を知っている大人がいる。それも本気で遊んだ仲間がね。

現在、小学生は6人。中学生は2人です。年齢を問わず、もっと仲間が増えれば良いなと考えています。

興味がある人は、ぜひ一度遊びに来てください。

連絡先 田中 041・4771

公民館

自治公民館と東京の公民館

先月号で、「自治公民館は、全国に、7万6千883館ある。」と書きました。ところで、この自治公民館とは、西東京市を含めて東京・三多摩に住む方々には馴染みのない言葉なのではないかと思えます。そして、そのことが東京の都市型公民館の弱点でもあります。

三多摩の方々にとっても公民館といえば、ほとんど例外なく公立公民館すなわち市町村立公民館を意味しますが、自治公民館は、その4・3倍もあつた。これらは地方によって地域公民館、町内公民館、小地区公民館、字公民館等々呼び方が変わります。これらの中にはいつも鍵のかかった古びた建物があつて、ごくたまに地域の集まりが開かれるだけの公民館も多いのですが、一方、東京の公民館などは足下にも及ばないほど地域の生活に密着した優れた公民館もたいへん多いのです。

例えばこんな事がありました。沖縄・読谷村の中央公民館を訪ねたときのことです。道が判らなくなつて通りかかった村人に「公民館はどこですか」と尋ね教えられた所に公民館はあつたのですが、それは字公民館でした。そこで目的の村立中央公民館の場所を聞いたところ、じつは先ほど村人に尋ねた場所の真ん前だったので。

三多摩の公民館のあり方を考える上でこのエピソードはたいへん示唆的です。 奥田泰弘 (西東京市公民館運営審議会委員・日本公民館学会事務局長)